

「青年海外協力隊」

山田 直之さん

YAMADA Naoyuki

村に溶け込んで活動する日本人

「モハメッドのおかげで元気になったよ!」

セネガル南東部、シンチューマレム村の診療所。ここで働く「モハメッド」は、この日も朝から村人たちとあいさつを交わす。「どこから来ましたか?」「どこが痛みますか?」。その優しい声に人々の表情が和らぐ。

そんな彼、モハメッドと呼ばれているものの、実は日本人。2011年に青年海外協力隊員としての地に赴任した山田直之さんだ。

JICA Volunteer Story

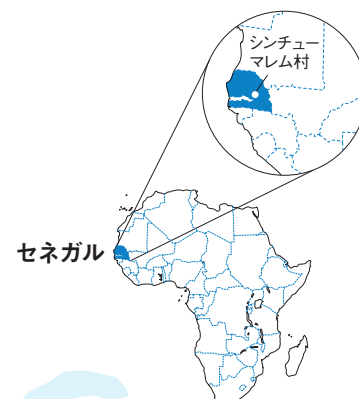
PROFILE

1982年沖縄県出身。大学卒業後、専門商社に約5年間勤務。退職後、2011年6月から、青年海外協力隊(村落開発普及員)としてセネガルで活動中。

「村人たちと健康な村をつくりたい」

医療サービスの普及が遅れている西アフリカのセネガルの農村。

青年海外協力隊員の山田直之さんは、村の人々の健康改善に取り組んでいる。



女性グループのメンバーに医療保険制度の仕組みについて説明する山田さん

生まれも育ちも沖縄。大学に入るまでほとんど県外に出たことがなかった。もともと視野を広げたいと、国際関係学を専攻し、開発学などの授業を通じて、開発途上国には支援を必要としている人が多くいることを学んだ。彼らの役に立てる仕事がしたい。いったん企業に就職して経験を積み、退職後、協力隊に応募した。

「雨期には、診療所に毎日たくさんの方が訪れます。そのほとんどがマラリア患者。この地域で最も深刻な病気です」。そこで取り組んでいるのが、マラリアを予防するには何が必要か、正しい知識を伝えるための啓発活動だ。「マラリアにかかるとどんな症状が出ますか?」「予防するためには何をすればいいですか?」。村の保健スタッフと協力して村人たちを集め、グループディスカッションなどを行い意識向上を図っている。

さらに山田さんは、村人たちとの会話を通じて、現地に多く生えているニームの葉に、マラリアを媒介する蚊を寄せ付けない効果があることを聞く。これは予防に使えるのではないかと。早速、彼らとニームの葉を使った石けんとクリーム作りを開始。山田さんの普及活動が実り、その手作りの石けんで手を洗うという習慣が、村のあちこちに広まり始めている。

母親たちと真摯に向き合う

もう一つ、山田さんが力を入れているのが村内の医療保険制度の普及だ。対象は、母親が集まる約10の女性グループ。少額の掛け金を毎週支払うことで、子どもが病気になった時には診察を無料で受けられ、薬も半額で買えるという制度だ。これは前任



a.医療保険制度の手帳を作成するためにメンバーの顔写真を撮影
b.マラリア予防の啓発イベントを開催し、ニームの葉を使った石けん作りの手順を説明
c.村にある保健センターで乳幼児への予防接種をサポート
d.ニームの葉を使ったクリーム作り。村人たちも積極的に参加している

の協力隊員が「子どもが病気になっても、お金がなくて治療を受けられない」という母親たちの声を聞き、2010年に導入したものだ。制度の説明をしたり、保険を利用するための手帳をグループのメンバーに作成したり、制度が定着するようにサポートをするのが山田さんの役割だ。

しかしそんな中、問題が発生する。「自分の子どもは病気にかかっていないのに、どうして毎週掛け金を支払わなければならないのか」。そんな不満が上がり始め、制度を拒否するグループが出てきたのだ。これまで必死に、村の子どもたちが健康になれるようにと奮闘してきた山田さん。しかしその思いが伝わっていなかったのではないかと、ショックを隠しきれなかった。

しかし、一人の母親が彼に声をかけた。「私の子どもが元気になったのは、この制度のおかげなのよ」。伝わる人には、伝わる。もう一度、この制度を見直してもらおうと山田さんは立ち上がった。不満を持つグループを巡回し、「グループみんな協力して子どもを守ることが大切。メンバーの子どもは病気が治り、命が救われれば、村全体が元気になっていくはず」と熱く語った。

そうするうちに、不満を持っていた母親たちにも変化が。子どもを守るため、メンバー「みんなが助け合う」という意識が定着し始めたのだ。その動きは近隣の村々にも波及し、新たに医療保険制度を取り入れたという声が広がっている。

「いつも優しく接してくれる村の人たちや無邪気な子どもたちと触れ合っていると、もっとみんなの役に立ちたいという思いが強くなります」と山田さん。活動期間は残り約3カ月。みんなの健康を守るために、全力で取り組む覚悟だ。